



Title	雨と女と恋の歌 : インドの雨季について
Author(s)	松村, 耕光
Citation	印度民俗研究. 2019, 18, p. 77-89
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/72059
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

雨と女と恋の歌
—インドの雨季について—

松村 耕光

北インドでは、3、4月頃が春季、5、6月頃が夏季で、7、8月頃——ヒンドゥー暦のサーワン (Sāwan) 月とバードーン (Bhādōn) 月——が雨季である¹。梅雨が終わって夏となる日本とは、当然、雨季に対する感覚は異なったものとなる²。本稿では雨季を扱ったウルドゥー詩をいくつか翻訳し、北インドのウルドゥー文学圏に見られる雨季のイメージを紹介したいと思う³。

雨季を扱ったウルドゥー詩は数多くあるが、1874年5月30日にラホールの詩会で発表された、近代ウルドゥー詩人ハーリー (Altāf Husain Hālī d. 1914) の「雨季 (barkhārut)」という有名な詩の一部をまず訳出する⁴。

ハーリーは次のように、夏季の厳しい酷暑の様子を次のように描写している——

あまりの暑さに生ある者は悶え苦しみ
山々は日差しに焼かれていた
砂漠の砂は真っ赤な炭よりも熱くなり

¹ 北インドの季節区分と西暦、ヒンドゥー暦の月との関係は、以下のようになる（水野善文、「インド人の文学的感性」、『東方』13号、1997年及び『新訂増補 南アジアを知る事典』、平凡社、2002年、の「季節観」の項による）。

春季		夏季		雨季	
3月半ば	4月半ば	5月半ば	6月半ば	7月半ば	8月半ば
チャイト (Chait)	バイサーク (Baisākh)	ジェート (Jēth)	アサーイ (Asārh)	サーワン (Sāwan)	バードーン (Bhādōn)
秋季		冬季		冷季	
9月半ば	10月半ば	11月半ば	12月半ば	1月半ば	2月半ば
クアール (Ku'ār)	カールティク (Kārtik)	アグハン (Aghan)	プース (Pūs)	マーグ (Māgh)	パーグン (Phāgun)

² インドの自然観と文学に関しては、水野善文、上記論文及び Martha Ann Selby, *The Circle of Six Seasons: A Selection from Old Tamil, Prākrit and Sanskrit Poetry*, New Delhi, 2003 等を参照。

³ 北インドのヒンディー文学圏でも事情は同じであると思われる。

⁴ ハーリーの詩のテキストには、*Iftikhār Ahmad Śiddīqī*, ed., *Kulliyāt-e Nazm-e Hālī*, vol. 1, Majlis-e Taraqqī-e Adab, Lahore, 1968 を使用した。

川の水はぐらぐらと沸騰していた
花園は略奪に遭ったかのようになり
森林は火事に見舞われたかのようになっていた
蜥蜴は穴に身を隠し
他の動物たちも悶え苦しんでいた
狐は舌を出して喘ぎ
鹿は熱風に黒くなっていた
チーターは狩りを忘れ
鹿は列を作ることを忘れた
虎は沼地にだるそうに横たわり
鶴は川でぐったりと横たわっていた
家畜の体は痩せ細り
牡牛は肩を落としていた
水牛の体内には血がなく
牡牛の乳房には乳がなかった
馬はえさを食べられず
渴きの鞭が馬を打ち据えていた
熱の ^{ほのから}焰 が起り立ち
誰もが精気を失っていた
.....
或る者は簾の陰で日を過ごし
また或る者は地下室に身を隠していた
商店街には人気なく
誰も歩いていなかった
昼夜繁盛していた店ですら
主人が手持ち無沙汰に座っていた
人だかりがしているのは
水飲み場だけだった
雨季が到来し、世界は一変する——

雨季の太鼓が鳴り響く
天に騒ぎが巻き起こる
雨雲の軍勢が先を行き
風の大軍が後を行く
白い騎兵がいるかと思えば
黒い騎兵も現れる
空に駐屯地があるかのようで
軍隊がしきりに行き交っている
戦闘に赴くのだろうか
幾多の大砲が従っている
大砲の列が前進し
大地の心は恐れおののく
激しい雨が地を打って
酷暑の舟を沈ませた
稻妻が光り
目が眩む
真黒な雨雲が天を覆い
天国の涼風が吹いてくる
.....
山々は花に覆われて
木々は花嫁のようになる
湿地は水が満ち溢れ
森はざわめきたっている
パピーー⁵が囁き鳴いて⁵
郭公⁵の声は心を酔わせ⁶

⁵ 「郭公 (papīhā)」カッコウの一種 (古賀勝郎・高橋明編、『ヒンディー語・日本語辞典』、大修館書店、2006年、によると、チャバラカッコウ)。

心の中に染み入ってくる
蛙が大きな声で鳴き出して
世界に騒ぎを巻き起こす

ブランコがぶら下げられ、娘たちが歌を歌いだす――

庭に柱が立てられて
ブランコが吊り下げられている
小さな女の子たちが集まっている
今日は女の子たちの遊びの日
歓びに胸を膨らませ
順番にブランコを揺するのだ
皆で歌を歌い合い
森に歌声を響かせる
皆の乗ったブランコを一人の女の子が揺するのだ
落ちるのではないかと怖がる子もいるけれど
マルハールを歌う女の子⁷
大きく揺する女の子
ヒンドーラーを歌う女の子⁸
異郷のドーラーを歌う女の子⁹
ブランコから誰かが振り落とされると
大きな声で笑うのだ

春にブランコに乗る風習が世界各地にあるようであるが¹⁰、北インドで

⁶ 「コーヤル 〔kōyal〕」 カッコウの一種 (『ヒンディー語・日本語辞典』によると、オニカッコウ。英語では koel。)。

⁷ 「マルハール (malhār)」 雨季のラーガ。雨季にこのラーガで歌が歌われる。

⁸ 「ヒンドーラー (hīndolā)」 ブランコをテーマとした歌。

⁹ 「異郷のドーラー (bidēsī dhōlā)」 どういう歌なのか不明。

¹⁰ 『新訂増補 南アジアを知る事典』の「ぶらんこ」の項によると、春の

は雨季もまたプランコに乗るべき嬉しい季節なのである。有名なウルドゥー詩人・評論家ムハンマド・フサイン・アーザード (Muhammad Husain Āzād d. 1910) は、その著『生命の水 (Āb-e Ḥayāt 1880 年)』の中で次のように記している¹¹。

「イラン、ホラーサーン、トゥーラーンでは春の季節が心を楽しませるように、ここ（インド）では雨の季節が心に歡びを生じさせるように思われる。彼の地の春には夜鶯（bulbul）があり、ここには郭公^{コーヤル}と郭公^{バビーハー}がいる。プラジ・バーシャーの文人たちが雨季の麗しさやその情景を見事に表現している。ジャハーンギールは回想録の中で次のように正しく指摘している¹²——インドの雨季は我々の春であり、郭公^{コーヤル}はこの地の夜鶯（ブルブル）である…と¹³。」(p. 57)

また、雨季のプランコに関してアーザード次のように述べている。

「デリーでは、と言うか、インドの多くの都市では、雨季の盛りに多くの女性たちは外に柱を立て、木があれば木を利用してプランコを吊り下げる。女性たちは集まってプランコを漕ぎ、歌を歌って楽しむ。次の歌を歌ったことのないような女性はいないことであろう。

行くからねとおっしゃったのに
あの御方は来られなかつた
行くからねと——ああ、おっしゃったのに

ホーリー祭の際にプランコが取り付けられるということである。俳句でもプランコは春の季語である。ふらんどや桜の花をもちながら（一茶）

¹¹ 英訳がある。Frances Pritchett, tr., *Āb-e Ḥayāt : Shaping the Canon of Urdu Poetry*, New Delhi, 2001.

¹² 「ジャハーンギール (Jahāngīr)」 ムガル朝第4代皇帝 (d. 1627)。

¹³ 1874年5月30日にラホールの詩会で発表した詩「恵みの雨雲 (Abr-e karam)」の中でアーザードは、次のように表現している (Tabassum Kāshmīrī, ed., *Nazm-e Āzād*, Lahore, 1978, pp. 125-126)。

おお、雨雲よ、雨季の王よ、来たれ
陸も海もおまえによって繁栄を得る
おまえの支配によって世界は一変し
天も地も姿を変える
輝き、色鮮やかな新春、世界の春
おまえはインドの国の春

行くからねとおっしゃったのに
12 ヶ月経っても来られなかつた
行くからねと——ああ、おっしゃったのに

この歌もアミール・ホスローの作品であり、彼が生み出したバルヴァー (barvā) のラーガで歌われる¹⁴。」

アーザードは、アミール・ホスローが年若い女性のために作った、次のような歌も紹介している。若い嫁が実家の母を思ってブランコを漕ぎながら歌う歌、という設定である——

雨の季節となりました
どうか母さん、父さんを、迎えに寄越して下さいな

雨の季節になったのよ
おまえの父さん、もう歳よ

雨の季節となりました
どうか母さん、弟を、迎えに寄越して下さいな

雨の季節になったのよ
おまえの弟、まだ若い

雨の季節となりました
どうか母さん、叔父さんを、迎えに寄越して下さいな

雨の季節になったのよ
おまえの叔父さん、役立たず¹⁵

¹⁴ Muhammad Husain Āzād, *Āb-e Hayāt*, Uttar Pradesh Urdu Academy, Lucknow, 1982, p. 68. アミール・ホスロー (Amīr Khwusrau d. 1325) は、インドのペルシア語詩人、音楽家。

¹⁵ Ibid., pp. 68-69. 雨季に嫁は実家に里帰りする習慣があった。

雨季を詠んだ、ムガル朝期の詩人ナズィール・アクバラーバーディー (Nazīr Akbarābādī d. 1830) の詩も非常に興味深いので紹介しておく¹⁶——

何と雨季とは楽しい季節
揺れる緑に、光る庭
雨だれ響く、心地よく
見るものすべて素晴らしい
友よ、雨の季節は楽しいね

森は緑の衣を纏い
花や草木も麗しい
稻妻光り、^{いかずち}雷響き
神の太鼓が鳴り響く
友よ、雨の季節は楽しいね

女たちは悶え出す
雨が胸に突き刺さる
雨雲見ては、口々に
「今年も知らんぷりだよ、あの人は」
友よ、雨の季節は楽しいね

郭公^{ヨーヤル}が啼きだすと
女の胸は張り裂ける
ピーピーピーピー鳴く声に¹⁷
「啼くな、^{ハビーハー}郭公、苦しいよ」

¹⁶ Muhammad Abd al-Rahman Barker & Shah Abdus Salam, ed., *A Reader of Classical Urdu Poetry*, Ithaca, New York, 1977 所収のテキストより訳出した。本書には英訳と注釈が付いている。

¹⁷ 郭公はピーピー (pī pī) と鳴くが、ピーには「愛しい人」という意味がある。

友よ、雨の季節は楽しいね

多くの女が苦しむよ

服は汚れて、涙が溢れ

ブランコ吊るさず、ショールも染めず¹⁸

壊れたかまどに、割れた鍋

友よ、雨の季節は楽しいね

体にはできもの、頭には吹き出物

胸には汗疹^{あせも}、背中には虫刺さされ

揚げパン食べて胃痙攣

イラクの奔馬のような下痢になる

友よ、雨の季節は楽しいね

お金を持ってる人達は

象に乗って、傘を差す

泥に倒れ込むのは貧しくて

靴を手に持ち、裾を捲って歩く僕たちだ

友よ、雨の季節は楽しいね

泥の道はヌルヌルで

真っ直ぐにさえ歩けない

滑るとターバン歪んでしまい

靴が脱げれば拾えない

友よ、雨の季節は楽しいね

多くの者が泥の中

着ている物は泥まみれ

¹⁸ 雨季が来たことを喜んで、晴れ間に女たちはショールを染める。

立とう立とうともがくのを
見ている者は笑うのだ
友よ、雨の季節は楽しいね

地位があろうとなからうと誰もが浮かれる季節だよ
卑しい者も貧しい者も、王様であろうと宰相であろうと
恋をする者も、される者も
ナズィールよ、誰もが楽しく浮かれる季節だよ
友よ、雨の季節は楽しいね

道がぬかるんだり、体調が崩れたりする心物憂き季節でもあるが、乾ききった大地が潤いを取り戻し、炎暑が収まり、心浮き浮きする季節でもある雨季——しかし、どうして女性たちは悶え苦しむのであろうか？ それは、雨季が男女の睦み合う季節であるからである¹⁹。愛する男性の不在は女性を大いに苦しめるのである。

アフザル (Muhammad Afzal d. 1625) という詩人は、有名なバーラマーサ (Bārah Māsaḥ 12 ヶ月ということ²⁰) 詩「ビカト・カハーニー (Bikāt Kahānī 苦悶の独白)」のサーワン月の部分で、雨季になつても夫 (あるいは恋人) が故郷に帰つて来ない女の気持ちを次のように歌つている²¹。

雨降る季節になったけど

¹⁹ 軍役や出稼ぎで村を離れていた男たちは、移動が困難になる雨季の前に、待ち焦がれている女たちの許に帰つてきて共に雨季を過ごした。

²⁰ バーラマーサは、月々の風物を詠み込みながら、男性を待つ女性の気持ちを表現する詩の形式。バーラマーサに関しては、Charlotte Vaudeville, *Bārahmāsa in Indian Literatures*, Delhi, 1986、坂田貞二、「若妻 1 年の 12 か月の歌、秋冬の四月の歌」、『国際協力』419 号、1990 年 3 月、「インドの詩に見る自然と人の暮らし——背の君の帰りを待ちわびる女心を詠った民謡を中心に——」、『詩と思想』2009 年 7 月号、「中世ヒンディー文学に採りいれられた一年の十二ヶ月を描く民謡バーラハ・マーサ——季節の移り替わりと女性の心の揺れに注目して——」、『ヒンディー文学』4 号、2009 年を参照。「ビカト・カハーニー」に関しては、渡辺真理、「ビカト・カハーニーの紹介」、『ウルドゥー文学』16 号、2006 年を参照。

²¹ これも先述の *A Reader of Classical Urdu Poetry* 所収のテキストより訳出した。本書にはアグハン月の部分も収録されている。

ああ、あの人は帰って来ない

サーワン月の到来を太鼓を叩いて知らせてよ
彼がいないと寂しいわ

黒い雨雲四方を覆い
孤独の軍隊が私を襲うのよ

郭公^{バビーハー}が「恋人よ」と日夜、鳴いている
蛙や虫も鳴いている

ああ、^{ヨーヤル}郭公^がが鳴くのを耳にして
体が炎に包まれる

真っ暗闇に螢が光り
ああ、焰に油を注ぐのよ

森の孔雀の鳴き声で
心は落ち着きなくします、体は安らぎ忘れます

池には水が溢れます、大地は緑になったのに
私の愛の苗木だけ、水がないので枯れるのよ

他の女はブランコに愛しい人と乗っている
嫉妬の焰が燃え上がる

サーワン月はもう終わり、私のあの人来なかつた
ああ、どこの女の^サ^レ仕業^レかしら²²

²² 民間で歌われるウルドゥー語・ヒンディー語の恋の歌は、伝統的に、女

ペルシア文化圏では春が愛の季節であるが、北インドの文化的伝統では——「バーラマーサ」の女性は年中、愛に悶えているが——雨季が愛の季節であり、インド映画の中で雨季の場面がよく描かれる——濡れ場で男女が文字通り雨に濡れる——のは故無しとしないのである。

性が男性を恋するという形式を探っている。相手がクリシュナ神である場合もある。この場合、相手の男性を神のような絶対的存在と見做していると解釈することも、恋する女性は神を恋い求める人間の魂の象徴であると解釈することもできる。この点に関しては、Annemarie Schimmel, *My Soul Is A Woman*, New York, 2003 [これは英訳で、原著はドイツ語。初版 1995 年] を参照。例としてウルドゥー現代詩人ミーラージー (Mīrājī d. 1950) のウルドゥー・ギート集『ギート尽くし (Gīt Hī Gīt)』所収の 84 番のギートの一部を、Jamil Jalibī が編纂した、改訂増補版ミーラージー詩全集 (*Kulliyāt-e Mīrājī*)、ラホール、1996 年 [初版の書誌情報不詳]、のテキストより訳しておく。

あの方とっても浮気なの、愛の義務など気にされず
布団を温めてもくださらず、いつお出でになるのか、シャーム様*
ねえ、あなた、黒い雨雲広がったわよ**

.....

愛しいあの方お見えになって、歓喜の雨の土砂降りよ
私のあの方お越しになった、シャーム様がお出でになった
ねえ、あなた、黒い雨雲広がったわよ

* 「シャーム様」 クリシュナ神のこと。「シャーム (shyām)」には黒いという意味があり、黒い雨雲と縁語になる。

** 「あなた」 親しい女友達に呼びかけている。